

易経における気象観*

田村 専之助**

まえがき

私は日本、朝鮮、中国における気象認識史、かたくいえば、日本気象学史研究、朝鮮気象学史研究、中国気象学史研究ということを永年やってきた者です。1958年秋、北京の学界でこのような専門の研究者として紹介をいただきまして、非常に珍らしがられました。ところが珍らしがられる、ということは、実はよくもあり、わるくもあるので日本でも、歴史学者からは、異端者として、かえりみられず、自然科学者としての気象学者からも、あまり深い御理解はいただけません。このことはすでに二十数年前に岡田武松先生や藤原咲平先生から御注意をいただき激励を受けてまいった次第です。私は私のような者が世界のかたすみ一人ぐらいいてもよい、とかたく信じています。朝鮮気象学史研究は朝鮮民主主義人民共和国の科学院で翻訳、出版をみています。日本や中国の気象認識に関する研究のうち、長い部分は日本では発表の便宜がありませんので、全部まとめた出版は十年または二十年後それぞれが完成した時に、皆様に御相談申し上げたいと思います。

さて貴機関誌に、はじめて御ねがいますこの論文は、中国の代表的古典の一つである“易”における気象観を追求したものです。御批判下さい。

1. 序 説

易は元來 divination であるが divination 自体は原始民族の一般的な習俗であって、特に異とするにはあたらないものである。けれども、易の占いのしかたは、中国人に特殊なものである。それは性質の相反する二つの爻から組み立てられている。ところが、かような dualism もまたどこにでもあるものである。しかし、柔剛二種の爻をあのような手順によってあやつり、えらび、あのように組み立て、その解をあのような占文や占文の解説文にてらして占いの答を得る組織は、どこまでも中

国人の面目が躍如とした独特のものである。易は近世にいたるまで、中国人の思想史上きわめて重い地位をしめしているといえる。ところが、気象学史上においても然りであって、気象現象の解釈には易がよっている陰陽思想が縦横に駆使されてき、占いという心理の側面もいつまでも消えず、有名な開元占経、天元玉曆璇璣経、同祥異賦などをはじめ占いに関する著作も少なくなく、そのなかには天気占いもふくまれたことはいうまでもなく、相雨経や風雨賦のようなものもつくられるに至った。

さて、上にふれたように、筮の数理的とりあつかいによって、爻がきまり、さらにその数理的な組合せをもとにするものであって、きわめて知識的な、複雑なものであり、思想的には陰陽説の上にきずかれていますのである。すなわち、まず筮による煩雑な数理的手段によって、卦がきめられ、卦名がつけられ、彖辞、爻辞によって卦の占いの答えが説かれ、象伝、象伝、文言伝などによって解釈され、さらに繫辞、説卦、序卦、雑卦などの諸伝によって、思想的に拡大解釈されているのである。占いの書としての易がすでに孔子以前からあったことは疑いあるまいが、史記の孔子世家にあるような、孔子が十翼をつくった、とする説はとうてい事実とは考えられない。今日みられる易が一度にできたものではあり得ないことは、誰がみても明白であるが、その成立の時を陰陽、五行、曆術の成立したころ、すなわち戦国時代の末（ほぼ B. C. 3 世紀後半）とみる説は従うべきものであろう***。かくして漢代になって儒家にとりあげられて、にぎやかに論議されるのである。

2. 技術 観

私は科学の成立を生産技術とイデオロギーとの弁証法的な相互刺戟にもとずくと考える****。気象観を気象の科学への道程とみ、それが取組んで行くべき技術自体から研究の一步をふみだすべきであるが、ここでは技術観の検討をもってそれにかえることとする。

まず

包犧氏没して、神農氏^{おに}作る。木を斲^しりて耜^しと為し、木を揉^くめて耒^{らい}と為し耨^{なう}の利、以て天下に教ふるは

* Meteorological Opinions Observed in the Yi-King

** Sennosuke Tamura, 静岡県沼津工業高校、—1960年1月10日受理—

*** 津田左右吉、儒教の研究第一。易の研究。

**** 拙著、東洋人の科学と技術。

蓋し諸を“益”に取る(周易繫辭下傳)。

黄帝堯舜衣裳を垂れて天下治まるは、蓋し諸を“乾坤”に取る。木を削りて舟と為し、木を刻りて楫と為し、舟楫の利、以て通ぜざるを濟し、速きを致して以て天下を利するは、蓋し諸を“渙”に取る。牛を服し馬に乗り、重きを引き速きを致して、以て天下を利するは、蓋し諸を“隨”に取る。重門繫析、以て暴客を待つは、蓋し諸を“豫”に取る。木を断りて杵と為し地を掘りて臼と為し、臼杵の利万民以て濟ふは、蓋し諸を、“小過”に取る。木に弦して弧と為し、木を刻りて矢と為し、弧矢の利、以て天下を感ずは、蓋し諸を“睽”に取る(同上)。

上古は穴居して野処す、後世の聖人之に易ふるに宮室を以てし、棟を上にし宇を下にし、以て風雨を待つは、蓋し諸を“大壯”に取る(同上)。

などとみえ、技術の元祖を神農や黄帝にもとめている。これは中国人がすべてのものごとの起りを説く場合の態度と同じだが*、ともあれ、ここには技術尊重の思想が強くあらわれている。一步進んで

君子以て厯を治め時を明かにす(周易下経離下兌上の革の卦の象伝)。

とあるが、これは農耕のために正しい時期を知るために暦が重要であるとする思想と、上にのべたところと同じくすべての知識や技術のもとを聖人や君子に求める上代中国人一般の思想とから、暦も君子が作ったとしたもので、これは尙書堯典に見える有名な“欽若昊天厯象日月星辰敬授人時”という句とも同じ思想である。ここでは農耕に役だたせるために天体が観測され、暦が作られたことすなわち当時における最高の科学が生産技術のためのものであることが明言されている。そうしてこれはすくなくとも“君子は器ならず”(論語学而第一)とか、“吾少かりしとき賤しかりき、故に鄙事に多能なり、君子多ならむや、多ならざるなり”(論語子罕第九)。などという技術を賤しいものとした孔子の思想とは相反する点に注意すべきである。

3. 自然観

私は自然観について研究する場合にはいつも宇宙観、

* 諸制度はもとより(荀子の礼論篇・性悪篇)、住居や火の作成まで聖人の教えとし(韓非子の五蠹篇)、後にはすべての技術や道具も上代聖天子が教えたものとされたのである。

** 周易序卦伝に“天地有りて然る後に萬物生ず”とあり、“天地有りて然る後に萬物有り”。ともある。

生物観、物質観、その他とわけているので、ここでも、その手法で行くことにする。

まず

“天行は健なり”。(周易上経 乾下乾上の乾の卦の象伝のうち)

“夫れ大人は、天地と其の徳を合し、日月と其の明を合し、四時と其の序を合し”、(同上の九四)

“天地は順を以て動く、故に日月過らず四時惑はず”。(坤下震上の豫の卦の象伝)

“天の神道を観るに四時惑はず。聖人神道を以て教を設け、而して天下服す”。(坤下巽上の觀の卦の象伝)

などとあって、太陽の出入、月のみちかけ、四季の順行は規則的であって、くるいがない、としている。これは占いとは無関係な思想で現実から抽象し帰納されたものであって、この現象を超自然的な力によるとはしていない。すなわち形而上学的でもなく、観念論的でもない。また元來性質の相反する陰陽二爻の相関によって変化を説き、さらに“物以て久しく其の所に居るべからず、故に之を受くるに“遯”を以てす。遯とは退なり。物以て遯に終るべからず、故に之を受くるに“大壯”を以てす。物以て壯なるに終るべからず。故に之を受くるに“晉”を以てす。晉とは進なり。進むときは必ず傷るる所有り、故に之を受くるに“明夷”を以てす。夷とは傷とは傷るるなり”。(周易序卦伝)とあるのなどは弁証法的であるというべきであろう。

つぎに生命観の側面をみると

則ち是れ天地交はりて万物通ずるなり。(乾下坤上の泰の卦の象伝)

天地交**化して、草木蕃く。(坤下坤上の坤の卦の文言伝)

感は感なり。柔上りて剛下り、二氣感應して以て相與するなり。止りて説び、男は女に下る。是を以て享り、貞しきに利ろしく、女を取るは吉なるなり。天地感じて万物化生じ、聖人人心を感ぜしめて、天下和平なり。其の感ずる所を觀て、天地万物の情見るべし。(周易下経艮下兌上の咸の卦の象伝)

天は施し地は生じ。(震下巽上の益の卦の象伝)

などとみえ、天地を男女とみ、その交合によって万物が生ずるとしている。したがって“則ち是れ天地交はらずして万物通ぜざるなり”。(坤下乾上の否の卦の象伝)、“天地交はらざれば万物興らず。”(兌下震上の歸妹の卦の象伝)ということにもなる。かような思想は呂氏春秋

の十二月紀*、礼記の月令（正月、十月）などにもみえ、当時の中国の知識社会に一般的に行なわれたものであるが、これはまた地球上の方々の民族の間でもみられる思想であり、習俗でもある**。近代の科学思想におけるように、自然の自律作用によって、万物が生れるとするのではなく、天地交合という形而上学的行為によって万物が生まれるとしている、すなわちこれは形而上学的唯物論というべきであろう。

易全体にみられる数量的要素についていえば卦の構成は徹頭徹尾数理でありまた構造の要素のうちに曆があることもわすれてはならない。

4. 気象観（概論）

易における気象観にはこんな時代のものとしては中々みるべきものがある。まず

是の故に剛柔相摩し、八卦相盪かし、之を鼓するに雷霆を以てし、之を潤すに風雨を以てし、日月運行して、一寒一暑あり。（周易繫辭上傳）

日往けば則ち月来り、月往けば則ち日来り、日月相推して明生ず寒往けば則ち暑来り暑往けば則ち寒来り、寒暑相推して歳成る。（同下伝）

などにおいては 日月寒暑がうつつ一年となる、とされているが、時間の経過をいいあらわすにあたって気象、季節を重くいつている。

天地位を定め、山澤氣を通じ、雷風相薄り、水火相射はずして、八卦相錯る。（周易説卦伝）

雷は以て之を動かし、風は以て之を散らし、雨は以て之を潤し、日は以て之を烜かし、艮は以て之を止め、兌は以て之を説ばし、乾は以て之に君となり、坤は以て之を蔵む。（同上）

神とは、妙にして言を為す者なり。萬物を動かす者は、雷より疾きは莫く、萬物を熨むる者は、風より疾きは莫く、萬物を燥かすものは、火より熨くは莫く、萬物を説ばす者は、澤より説ばすは莫く、萬物を潤す者は、水より潤すは莫く、萬物を終へ萬物を

始むる者は、艮より盛なるは莫し。故に水火相逼り雷風相薄らず山澤氣を通じ、然る後能く変化して、既く萬物を成すなり。（同上）

においては八卦のはたらきを説くにあって 日、月、寒、暑、雷、風、雨がはたらいて万物が生まれ、躍動するとしている。ところが実は、これは先にのべた天地の万物生成を機能面からこまかくいったものにすぎない。

ともあれ、ここで気象要素を万物の生成、活動に大きな力があるものとしている点は注意を要する。また坎下震上の ☱☳ ☱☳（解）の卦の象伝に“天地解けて雷雨作り、雷雨作りて百花草木皆甲折す。解の時大いなる哉”

（周易下経坎下震上の解の卦の象伝）においては坎＝雨と震＝雷からできている卦の構造の説明、解釈ではあるが、雷雨とくに雨によって草木が生い茂るものとみる。あの土壌、あの気候下にすんでいた北部中国の農業人としては当然な思想がこの解釈に適用されたものと考えられる。ところが坎下兌上の困の卦 ☱☱ ☱☱、および震下坎上の屯の卦 ☳☵、☳☵の各象伝などにおいては坎＝水が、雲または水と解されているが、困の卦の象伝では險とされ、屯の卦の象伝では難とされ、離下坎上の既済の卦 ☵☵ ☵☵、坎下離上の未済の卦 ☵☲ ☵☲などにおいては坎は上記のように解されてはいない。また巽 ☴☴ = 風も乾下巽上の小畜の卦 ☴☱ ☴☱、巽下巽上の巽の卦 ☴☴ ☴☴などの各象伝では風として解されているが、巽下坎上の井の卦 ☵☱ ☵☱および巽下離上の鼎の卦 ☲☱ ☲☱では巽は特に風と解されてはいず、論理的には甚だ不統一である。

5. 気象観（各論）

まず坤の初六に“霜を履みて堅氷至る。”とあるのは、いうまでもなく季節移行による気温の漸進的変化の認識であるし、


剛柔始めて交りて難生じ、險中に動くなり。大いに享りて貞なるは、雷・雨の動満盈すればなり。天造草昧宜しく侯を建つべくしてはまだ寧からず。（震下坎上の屯の卦の象伝）

では剛柔すなわち 天地が交って、雨が将に降ろうとしていることをいって、

天地解けて雷雨作り、雷雨作りて百花草木皆甲折す。解の時大いなる哉。（坎下震上の解の卦の象伝）も、同じことであろうし “雷雨作るは解なり。君子以て過を赦し罪を宥む”。（坎下震上の解の卦の象伝）とても同じことにちがいない。このようにして降ってくる雨

* 繫辭下伝の“天地綱縕して萬物化醇し、男女精を構せて萬物化生す。”という有名な文句も思いたすべきである。


** 拙稿二宮尊徳の気象観（科学史研究、1959年52号）、中国以外の例は安田徳太郎氏の“人間の歴史”からの引用であるが、紙数超過のため、その旨の註を省略してしまったので、上記の論文を私の“日本気象学史研究”の一部として採録する時には明記します。

を、機能面*からみれば“雲行き雨施して、品物形を流く”。(乾下乾上の乾の卦の象伝)と品物すなわち万物は雨によって形づくられることにもなる。したがって雨が程よく降れば万物が育成されるから、当然“雲行き雨施して、天下平かなるなり。”(乾下乾上の乾の卦の九五)ということにもなる。雨に関する関心はきわめて強く、“既に雨ふり、既に處まる。徳を荷びて載てるなり。婦は貞なれど厲し。月望に幾ければ、君子も征くときは凶なり。”(乾下巽上の小畜の卦の上九)、“既に雨ふり、既に處まるとは、徳積みて載てるなり。君子も征くときは凶なり、とは疑はしき所有ればなり。”(同上の象伝)とみえ、また、“小畜は享る。密雲雨ふらず。我が西郊よりす。”(乾下巽上の小畜の卦の象辞)、“密雲雨ふらずとは、往くを尙ふなり。我が西郊よりすとは施し未だ行はれざるなり。”(同上の象伝)ともある。そのほか艮下震上の小過の卦  の六五の爻辞に“密雲雨ふらず。我が西郊よりす。公弋して彼の穴に在るを取る。”とあり、その象伝には“密雲雨ふらずとは、已だ上ればなり。”とある。これは卦の形と関係がありそうである。最後に“寇するに匪ず婚媾す、往きて雨に遇ふときは則ち吉なり。”(兌下離上の睽の卦の上九)などにあつては結婚と雨とに関する俗信が顔を出しているのかも知れない。いずれにせよ、寡雨地帯における農耕民族の雨に対する心理が如実に表われているといえるであろう。

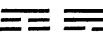
つぎに風についてみると

飛竜天に在り、大人を見るに利ろしとは、何の謂ぞや。子曰く、同聲相應じ、同気相求む水は濕に流れ、火は燥に就く。雲は龍に従ひ、風は虎に従ふ。聖人作りて萬物観る。天に本づくものは上に親しみ、地に本づくものは下に親む。則ち各々其の類に従ふなり。(乾下乾上の乾の卦の九五)

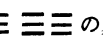
では竜、雲、天と虎、風、地等が 対立物として関連させて取りあつかわれているが、世の人もよく知るように、この用法は後世永く行はれている。ただし、いうまでもなくここには何らの論理的関連**もない。しいて観

念連合の道すじを推測すれば、天に在るものと考えられた竜に対して地に在る虎が対立物としてあげられ、天の雲に対して地の風がもちだされたものと考えられる。しかし気象現象としての雲と風とを対立物とするのはあくまでも無意味である。また巽下乾上の姤の卦  の象伝に

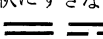
天(乾)の下に風(巽)有るは姤なり。后以て命を施し四方に誥ぐ。(巽下乾上の姤の卦の象伝)

とあるのや、巽下乾上の蠱の卦  の象伝に

山(艮)下に風(巽)あるは蠱なり。

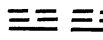
とあり、坤下巽上の觀の卦  の象伝に、

風(巽)の地(坤)上を行くは觀なり。

などとあるのは卦の解釈にすぎないようであるが 離下巽上の“家人”の卦の  の象伝に、

風(巽)の火(離)より出づるは家人なり。

は卦の形の解釈ではあるにしても、火熱に上る上昇気流の観察、という事実が根柢にあることは疑いがない。これは前に引用しておいた乾の卦の九五に“水は濕に流れ、火は燥に就く。”における経験的知識とまったく同じである。

つぎに雷はなかなか豊富であつて***、震下震上の震の卦  には多くの記事がみられる。すなわち震は享る。震の来るとき皦皦たり。笑言啞啞たり。震百里を驚かせども七鬯を喪はず。

象に曰く。震は享る、震の来るとき皦皦たりとは、恐れて福を致すなり、笑言啞啞たりとは、後には則ち有るなり。震百里を驚かすとは、遠きを驚かし遯きを懼れしむるなり(七鬯を失はざるものは、)出でて以て宗廟社稷を守り、以て祭主となるべきなり。象に曰く、洊に雷あるは震なり。君子以恐懼脩省す。

(初九)、震の来るとき皦皦たり。後には笑言啞啞たり。吉なり。

象に曰く、震の来るとき皦皦たりとは、恐れて福を致すなり、笑言啞啞たりとは後には則ち有るなり、(六二)、震の来るとき厲し億りて貝を喪ひ、九陵に躡る。逐ふこと勿れ七日にして得ん。象に曰く、震の来るとき厲しとは剛に乗ればなり。

(六三)、震蘇蘇たり。震ひて行くときは眚無し。

象に曰く、震蘇蘇たりとは、位當らざればなり。

(九四)、震遂に泥む。

象に曰く、震遂に泥むとは、未だ光ならざればなり。

* 天地の気が和して雨となるとか、陰陽が和すれば雨となる、とかいう思想は後の大戴礼記や春秋元命苞などにも、うけつがれている。

** 代表的なものとして淮南子、天文訓・論衡、偶会篇・春秋元命苞など。

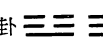
*** 洪範五行伝には雷は百八十三日間、すなわち半年の間地上に出で、あとの半年は地中に入っている、とする思想があり、五雜俎にも雷は地中より起るとする思想がある。

(六五)、震往くも来るも厲し。意りて事有るを喪ふこと无かれ。


象に曰く、震往くも来るも厲しとは、行くも危しとするなり。其の事の中に在り、喪ふこと无きを大とするなり。

(上六)、震索索たり。視ること矍矍たり征くときは凶なり。震ふこと其の躬に予てせず、其の鄰に予てするときは、咎無し。婚媾言有り。


象に曰く、震索索たりとは、中未だ得ざればなり。

凶なりと雖も咎無しとは、鄰の戒を畏るればなり。のように、にぎやかである。そのほか乾下震上の大壯の卦  の象伝に


雷(震)の天(乾)上に在るは大壯なり。

とあり、震下乾上の无妄の卦  の象伝に


天(乾)の下に雷(震)行き、物ごとくに无妄を興ふ。

とあり、艮下震上の小過の卦  の象伝に


山(艮)上に雷(震)有るは小過なり。




とあり、震下艮上の頤の卦  の象伝に、

山(艮)下に雷(震)有るは頤なり。




とあるのなどは卦の形の解釈であり、震下離上の噬嗑の卦  の象伝に

剛柔分れ、動(震)きて明(離)かに、雷(震)電(離)合して章かなり。

も同じであろう、ただし艮下離上の旅の卦  を山上の電光とはしては、ここにも不統一がある。

つぎに震下兌上の隨の卦  の象伝に“澤(兌)中に雷(震)有るは隨なり。”および震下坤上の復の卦  の象伝に“雷(震)の地(坤)中に在るは復なり。”や坤下震上の豫の卦  の象伝に“雷(震)の地(坤)を出でて奮ふは預なり。”なども卦の形の解釈ではあろうが、後世の文献にみられるような雷は地中から地上へでてくるものであるとする思想が当時にも

すでに存在して、それがここに適用されたのかも知れない。

そのほか説卦伝に“帝は震に出で、巽に齊ひ、離に相見、坤に致役し、兌に説言し乾に戦ひ、坎に勞し、艮に成言す。”とか“萬物震に出づ。”とか“神とは、萬物に妙にして言を為す者なり。萬物を動かす者は、雷より疾きは莫く、萬物を繞むる者は、風より疾きは莫し。”などとあるのも雷を重くみ、それをおそれる原始的心理にもとづいたものと考えられる。離下震上の豊の卦  の象伝に“雷電皆至るは豊なり。”とあり、巽下震上の恆の卦  の象伝に“恆は久なり。剛(震)は上りて柔(巽)は下る。雷風(震・巽)相与し、巽ひて動(震)き、剛柔皆應ずるは恆なり。”とあり、また震下巽上の益の卦  の象伝に“益は動(震)きて巽ひ、日に進むこと疆無し。天は施し地は生じ、其の益・方無し。”とあり、象伝には“風雷(巽・震)は益なり。”とある。これらにおいては、雷について雨が予想され、それによって万物が繁茂するとみる思想が根柢にあるようである。ともあれ雷に関する心理は上代のギリシャ、インド、日本などの場合とも同じく、人間一般の原始心理がみられるようである。

6. 結 語

今日の易経にみられる気象観は政治的支配者に隷属し、彼等に奉使していた知識階級のものである。それにおいて雨が重くみられているのは、彼等がよっていた雨の少い北部中国の社会が人民の農作によって支えられていた結果に相違ない。そうして雷が強く働いているのは、恐ろしいもの、はげしいものに対する原始心理からと、間接に雨を降らせるものとしてであったと考えられる。これは後世の中国気象学の興味を中心に、儒教思想に毒せられて気象学的光象へうつっていくのと鋭い対立をみせている。